

1980/1/9

セプティミウス・セウェルスの裁きの部屋。オイディプスの物語との比較

【セプティミウス・セウェルス???

ローマ皇帝 (1-2 世紀)

- ・ 宮殿の天井に彼が生まれたときの天空を描かせた
：彼の生誕を支配し、そしてその運命も支配する星々の結合の表現
- ・ 示されたロゴス¹
 - 彼が語ることは、天空において決定的に定められた事物の秩序そのもの！という「正当化」
 - 彼の支配や権力奪取は星々が決定的に支えていて、「必然性」が彼を帝位に呼び寄せた。(≠法)
 - 皇帝としての彼の運命がどうなるのかを前もって示し、運命的で不可避で不動なものであるかを示した。

→ 皇帝の私室に描かれた天空のごく小さな一片：皇帝の運命の終わりを定めるものは、人々から遠ざけられた。

【オイディプスの物語】

不吉な神託 (王を殺し母と交わる) を受け、テーバイの王ライオスに捨てられ、コリントス王夫妻の子として育てられる

↓

再び「父を殺し、母と交わるだろう」という神託→避けるために放浪し、旅の途中、実父と知らず、ライオスを殺害

↓

スフィンクスの謎を解きテーバイの都を救い、母であるイオカステと結婚し子ども 4 人をもうける。

(劇はここから始まる) ↓

テーバイで起こっている疫病による災厄を解決しようとするオイディプス

↓

王妃の弟・クレオンがあずかった神託「ライオス殺しの犯人を追放せよ」を受け、犯人捜しにとりかかる

↓

盲目の預言者テイレスiasを招くが預言を拒むが、オイディプス王が激怒→テイレスiasは、「オイディプスが犯人」と告げる。オイディプス、困惑。クレオンをも疑う。

↓

イオカステは、先王が子どもをかつて捨て、実際どう死んだかをオイディプスに告げ、オイディプス不安に。

↓

コリントスからの使者が、コリントス王が亡くなったことを告げ、「父殺しをせずに済んだ」と思ったところ、使者から、コリントス王が実父ではないことをオイディプスが知る。

↓

コリントスの羊飼 (オイディプスをかつて助けた) が、オイディプスの出自を告白。イオカステは自殺し、オイディプスは自らの目をつぶす。

参考 (100 分 de 名著 オイディプス王)

¹ 「ことばを媒体として表現される理性」、「万物が流転するという宇宙の真理、理法」など。(日本国語大辞典より)

- ・ 古代ギリシアのソフォクレスによる悲劇。
- ・ セプティミウス・セウェルスの裁きの上空の星空と見事な反対物を形づくる…

| セプティミウス・セウェルスの裁きの部屋 | オイディプスの物語 |
|---|--|
| 運命は頭上の天井に星空として描かれていた。 | テーバイからコリントス、コリントスからテーバイへの歩み・足元に運命が控えていた。 |
| 申し渡す裁きや決断は、目に良く見える世界の秩序に書き込まれ、裁きや布告を権利上支え、必然性と真理へと変わる | 闇と無知に完全に覆われ、彼自身に対する罫となるような運命に刻み付けられる |
| 彼の死の天空は隠されていた | 少なくとも一人（田舎の奥地の羊飼いが、オイディプスの運命の断片を知っている |

権力の講師と真理の現出化[=表明] (manifestation)。アレテュルジー…p6, L4

- ・ セプティミウス・セウェルスの行いは、単なる“お遊び”ではない。
 - 法では、統治権を認めさせることができない
 - 彼が自分の権力行使を、真理の現出[=表明] (manifestation) として刻み込み、自分の権力の濫用をも世界秩序の名の下に正当化しようとした。
- ・ 権力行使と真理の現出の関係に、「それらについての情報や知識」が必要で、それなくして統治はできない、と確かに話してきた。
- ・ でも、どうやら経済原理的な必要：功利的必要性だけで、「統治」はされていないのではないか？
 - ① セプティミウス・セウェルスの権力行使によって現出する真なるものは、統治に有益な知識の枠をはるかに超える。
 - 法学者たちの知識や知の次元をも超えて、真理のこうした補足的で過剰な現出化が、非経済原理的な現出化が必要だった。
 - ② この真なるもの（少々贅沢で、補足的で、過剰で、無益な）が現出するあり方は、およそ知識の次元（作成され、蓄積され、集中化され、利用されたような）ではなかった。
 - 真そのものの現出（世界秩序、皇帝の運命、それを支配する必然性、君主の布告）がされた。
 - 統治の知識を整理したり、統治を行使したりするために必要にして十分な功利的な知識体系を組み立てることではない。
- ・ 《真理を現出させる儀式》と《権力行使》の関係は、たんなる功利性にはおさまらない。
- ・ セプティミウス・セウェルスの権力行使の例
 - 合理的認識の活動のようなものだけではない。
 - ： 言語的な医師は非言語的な手続きの総体
 - ： 呪術的儀式や儀礼などさまざまな活動、占い、お告げ、神託などでもありうる
 - 手続きの総体によって、真なるものとして肯定されたり、措定されたりする何かが出現する。
 - ごく広い意味での真理の現出化が、かなりの頻度で権力行使に伴っている

【偽り、隠されたもの、言い得ないもの、予測不可能なもの、忘却】（≡オイディプス）との対比において、【真として措定されるものを出現させるような、言語的ないしは非言語的な、可能な手続きの総体のこと】を「アレテュルジー」と呼ぶ。

- アレテュルジーのようなものなしには、おそらくいかなるヘゲモニー（権力行使）も行使され得ない。
- 学問や客観的認識などは、真を現出させるための諸形態の可能な一例にすぎない。

恒常的に存在してきた、権力と真理の関係 p9, 118

アレテュルジーのあり方は、皇帝の頭上に星空を描くことから、合理的な問題や技法としての統治術（経済学、社会、人口学の知識など）にとって代わられた。

しかし；

- ・ 周辺の残存物に過ぎないものが、よくよく検討してみると発見的な価値を持っている。
- ・ アレテュルジーという、ごく広い意味での真理の現出化の歴史は、魔法のように消えてしまうということではなかった。

例1. 王宮、国家理性

➤ <真理の純粋な消尽>と<真理の純粋な現出>があった。：真理の現出の修正

- ・ 権力があるところ、権力が必要なところ、ここにこそ権力が宿っていると示したいところには、真なるものがなくてはなりません。
 - 15, 16, 17 世紀に見られる君主権の強化
 - ：統治術に有益な一連の知識を整えることともに、一連の知の儀式や現出化も必要（呪術師、占星術師、占術師などの存在）
 - 国家理性
 - ：権力行使に固有なさまざまなアレテュルジーを功利的かつ計算主義的に焼き直した。
 - ：権力行使にいわば内的で有益なタイプの知を構成
- 国王の宮廷から、占術師を追放し、助言者でもあり、真理の保持者、祈願者であった占星術師に代えて有用であるような知識を君主に授けることのできるような本当の意味での大臣を置かなければならなかった。

例2. 魔女狩り

- 表面的にのみキリスト教化されていた住民のある階層を取り戻すための現象だったのではない。
- 上流階級、国王周辺で、呪術社狩りや占星術師狩り、占術師狩りがあった。
- ・ いくつかの理由によって、民衆層のみならず、君主の取り巻きや宮廷においても、このようなタイプの知、真理の現出、真理の算出、アレテュルジーを排さなければならなかった
- ・ ボダン：二つのこと<国家理性>と<悪魔祓い>について研究→思想の二重帳簿

今年度の講義計画：知-権力の主題からの移動：権力概念から統治の概念→知の概念→真理の問題 p13, 19

真理による人間たちの統治の概念を練り上げること。

→この数年間の講義でも取り扱われた。

→「概念を練り上げる」とは？

- 知-権力という使い古され、安っぽくなってしまった主題を、議論の中心から外してしまうこと

二つの移行の流れ

| | | | |
|-------|--------------------------------|---|---|
| 第一の移行 | 支配的イデオロギー： 支配的表象のシステムとしての概念 | ➔ | 知-権力の概念： 権力諸関係が行使される手続きや技法という問題 や分析領域を持ち出すこと。 |
| 第二の移行 | 知-権力の概念 | | 真理による統治の概念 |

■ 昨年度までの2年の講義

- ・ 「統治」の概念の吟味
 - ≠ 国家システムにおける法の執行や行政における最高決定機関という現在の狭い意味
 - = 人間を導くための、人間の振る舞いを指揮するための、そして人間の振る舞いを導くための手続きやメカ

ニズムという広い意味、それも古い意味

- 2年前：17世紀における国家理性の誕生…『領土・安全・人口』（ゆるフーⅢ）

国家理性≠国家の理論や表象

国家理性＝統治術、統治の実践そのものを練り上げる合理性

- 1年前：アメリカとドイツの現代の自由主義

自由主義≠経済理論や政治学説

自由主義＝統治するためのある種の方法、ある種の合理的な統治術

- 今年：知の概念を真理の問題のほうへ

統治術と真理のゲームの相互依存

その形態：権力行使と真理の現出化の関係は、近代政治思想において、5つの方式に整理できる。

権力行使と真理の現出化の関係を考える5つの方法 p15, 115

| | |
|----------------|---|
| 【第一の形態】 | ボテロの原理；国家理性と合理性原理 <ul style="list-style-type: none">・ もっとも古く、ごく一般的かつ平凡なもの・ 統治者が自分の行為や選択や決断を、<u>＜真であるような知識の総体、合理的な根拠をもった原理、正確な知識などの相対との相関関係＞</u>で遂行しなければならないという考え方 → 国家理性 <ul style="list-style-type: none">➢ 現出させるべき真理は、統治行為の対象としての国家の真理 |
| 【第二の形態】 | ケネーの原理：重農主義者たちの考え方；経済的合理性と明証性の原理 <ul style="list-style-type: none">・ 統治が智慧一般ではなく、真理、すなわち国家という現実——人口、富の生産、労働、商業などが構成する現実を特徴づける過程の正確な知識によって統治すればするほど、統治は少なくなる、という考え方 → 権力行使は真理の指標となる <ul style="list-style-type: none">➢ 真理の指標化が十分に論証的に行われさえすれば、万人がそれに賛成し、究極的には統治機関までも不必要になったり、社会や経済の真理の反射面に過ぎなくなる➢ 人々が明証性の規則に従って統治するならば、統治するのは人間ではなく、事物そのものだという考え方 |
| 【第三の形態】 | サン＝シモンの原理；明証性の科学的特殊化と能力の原理 <ul style="list-style-type: none">・ 統治術が根本的に真理の発見やこの真理の客観的認識に結びついているということは、特殊な知の構成やこの真理の認識についての特殊な範疇に属する諸個人の養成を意味するように…：専門化 ➢ 政治に対していやが応でも課せられるような事態や関係の総体を規定するような領域が構成されるようになる。 |
| 【第四の形態】 | ローザ・ルクセンブルクの原理；特定の能力の普遍的覚醒への転倒、一般的意識の原理 <ul style="list-style-type: none">・ 第三の形態に対する正反対の立場・ ある種の個人が真理の専門化を自称し、その真理が政治に課せられるべきというのは、結局彼ら何かが隠さなければならないから、という考え方 ➢ 私たちすべてが自分の生きている社会で何が起きているかを、すなわち私たちが無意識のうちに担い手であり犠牲者であるような経済的な過程を意識化し、支配と搾取のメカニズムを意識化しよう→現実に何が起きているかが万人に明らかになったという事実と、何人かの人物による統治の行使は両立しなくなる…はず。 |

| | |
|---------|--|
| | ➤ 統治や体制や体系の転覆の原理としての普遍的意識化の原理 |
| 【第五の形態】 | ソルジェニーツインの原理；不可避性という幻惑的な共通意識、恐怖政治の原理 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ ローザ・ルクセンブルクの方法とちょうど正反対 ・ 恐怖政治の原理；被統治者がしているから、起きていることの明白さが万人の意識にあるかぎりにおいて自体は動かない。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 凍りつかせる真理、明白であることによって自己を表わす真理、いたるところで明白なものとして現れることで、みずからを不可侵で不可避なものとする真理 |

- ・ 真理の現出化と権力行使の関係を考えるためのいくつかの方法を指摘したのは、そのそれぞれの狭さを示すためにほかならない。
 - それぞれの関係が規定したもの：
 - ・ 知の対象としての社会
 - ・ 自発的な過程の場としての社会
 - ・ 反抗の主体としての社会
 - ・ 恐怖政治の幻惑の対象＝主体としての社会
- これらは現象の多かれ少なかれ客観的な認識の形態を持っているような知との関係で作り上げられている
 - 真理の現出化と権力の関係が結びつるためには、統治術と政治的・経済的・社会的な合理性の間に、近代的な新たな関係が作られる時期を待つ必要はなかった
 - 権力行使と真理の現出化が結びつたのはずっと古い時期にはるかに深いレベルにおいて
- 人間を導くためには、真理の次元の操作、つまり効果的に統治するために有用に必要なものをつねに超え行くような操作をすることがかならず必要なのはどうしてなのかを示したい。

整理

統治があるところには、必ず「真理の現出」がある、ということ。そしてその「真理の現出」はこれまで議論してきたような安全装置的な、経済合理性を目指す意味での「真理」とは次元の違うところで、「真理の現出」は行われてきたのではないか。しかも、それはずっと昔から…。そこで、知-権力の概念から、真理による統治の概念を、この年度の講義で考えていこうとしている、ということ。

フォーコーは、「学問や客観的認識などは、真を現出させるための諸形態の可能な一例に過ぎない」(p9, 115)ともしている。それだけ、「fact」が、さまざまな形で成立しうる、ということでもある。ある fact を fact たるものと証明しようとする…真理の現出／アレテュルジーを目指すことで、そこに権力が宿る、ということ。モスクワにおける「真理の現出」は…。

一方で、オイディプスの例は、「真理」に翻弄される話でもある？